

## 中国人・身近な隣人から己を知る ～周作人研究を通して～

早稲田大学 商学学院  
教授 小川 利康

### 1. 「叛徒と隠士周作人の1920年代」について

今回のお話しさせていただくのは拙著「叛徒と隠士周作人の1920年代」の一部であります。2019年に刊行しました。本書では日本留学での学びが周作人の生涯にわたって大きく影響したことを詳細に跡づけています。今日のお話にももしご興味お持ち戴き、手に取っていただければ幸甚に思います。

### 2. 本日のお話のアウトライン

今日のお話は標題の通り、中国人という身近な存在から日本人としての己を再発見するというものがあります。日本と中国は一衣帯水、まるで一筋の帯のような狭い川・海で隔てられているだけの、近い存在と呼ばれ、実際、漢字をはじめとして、さまざまな文化思想の影響を受け、また近代以降は日本からの影響も非常に大きかったといえます。

ところが近しすぎるゆえに、日本人は中国人を、中国人は日本人を自分と同じように考えるものと期待し、それが裏切られると、あたかも相手に過失があったかのように感情的になるため、日中間では意図しない誤解が多々あります。近しすぎるゆえの誤解は恐らく日韓についてもいえることと思いますが、本来近い存在であることは互いを理解するためにメリットであっても、デメリットではないはずで、相手も自分と同じだという思い込みさえなければ、誤解は乗り越えられでしょう。

本日は、百年前の日本に留学した魯迅、そして弟の周作人が若き日に日本、東京で学んだことを中国でどのように活かしたのかをお話しさせていただきます。まずは周作人の略歴からご覧下さい。

### 3. 1-1, 鏡像としての周作人①


周作人は狂人日記、阿Q正伝などの小説を書いた魯迅という兄が居ます。中国近代文学の黎明期を代表する作家として、日本でもよく知られています。

周作人は兄魯迅とともに日本に留学し、5年近く滞在し、日本女性の羽太信子と結婚しました。信子は周作人に嫁ぐと、周作人との間に1男2女（豊一、静子、若子）をもうけ、1962年に75歳で亡くなるまで周作人とともに50年余りの歳月をともに過ごしました。留学から帰国後は北京大学教授として五・四運動期には新たな口語文学を生み出すために理論的リーダーとして活躍しました。生涯にわたり、文学だけでなく、民俗学やギリシア神話など幅広い分野で執筆活動を行い、非常に多くの翻訳を残しました。日中戦争期には日本占領下の北京で文部大臣に相当する役職に就いたため、日本敗戦後

は戦犯として南京で3年余り投獄されました。国民党が南京から撤退の際に、保釈されて、中華人民共和国成立する数ヶ月前に北京へと帰還しました。兄魯迅も日本の社会文化に深く精通していたが、周作人の日本に対する理解はより深く広いといえる。そのような知日家が時の日本の政権に協力したがために今日に至るまで、民族に対する裏切り者として批判をされ、文学作品も正當に評価されないのは日本人として残念であると考え、より深く知りたいと考えたのが私の研究の動機でもあります。

### 1-1, 鏡像としての周作人①

- ▶ 周作人(1885-1967)
- ▶ 中国の学者・日本文化研究者。魯迅の弟。北京大学教授。文学革命の理論家として活躍。日本占領下の北京で官職に就いたため、第2次大戦後は国民党により投獄。人民共和國成立後は翻訳、回想録執筆に従事したが、文革中に迫害死。評論集「自分の園地」「瓜豆集」など（『広辞苑』による）。
- ▶ 20世紀初頭に魯迅とともに日本に留学、留学中に羽太信子と結婚。生涯にわたり、日本文学作品を多数翻訳、20世紀を代表する知日家である。



晩年の周作人（1960年代）

#### 4. 1-1, 鏡像としての周作人②

周作人が日本に留学したのは、欧米列強、そして日本からの侵略を受けて、滅亡の危機に瀕していた中国社会を救うために日本に留学してきたのです。

つまり、日本から学ぶことで中国の近代化を進めようと考えたのです。当時、日本は明治維新以降、急速に西洋文化を取り入れ、新しい科学技術や法制度を導入して、中国に先んじて近代化に成功していました。

そのため、手っ取り早く近代化するための方法を学ぶには欧米で学ぶよりも、日本での導入の仕方を真似た方が早いと考えたのです。

その結果、費用も、時間もかかる欧米への留学者を少数にとどめ、大量の学生を日本留学に送りました。近くて、費用的にも安価で留学できる日本、とくに東京は20世紀初頭から中国人留学生で溢れていたといえるでしょう。昨今言われるインバウンド現象です

当時、留学生受入の制度も整っていなかった日本の学校でいち早く留学生を受け入れたのは主として私立学校で、魯迅は嘉納治五郎が創立した弘文学院で日本語を学んでから、東北大学医学部の前身である仙台医学専門学校に入りましたが、中退して東京に戻り、周作人は留学生会館の日本語クラスや法政大学予科で勉強しましたが、二人とも正規の学歴を身につけることはありませんでした。これは本人たちの判断でもありますが、制度的な不備も関係しています。

魯迅のほか、中国共産党の創設者として知られる李大釗や陳独秀はみな東京専門学校（現在の早稲田大学）で学んだと伝えられていますが、そのためです。彼らは国立大学に入りたくても入ることができず、李大釗はそれでも早稲田大学を卒業しましたが、陳独秀は本当に在籍したかどうかさえはっきりしません。魯迅、周作人も又然りです。

現実問題として、留学に来た中国人学生も年齢もさまざまなら、学力もさまざままで日本語ができない者がほとんどで、中学高校で学ぶべき、基礎的な理科や社会の知識も無いため、大学予科で学ぶ課程で基礎学力を身につける必要がありました。

清朝が倒れ、中華民国が成立する1910年

代からは徐々に留学生受入の制度も整備され、中国からの留学生の学力も平準化されてくると、旧制一高の特設予科で基礎学力を身につけ、旧制帝国大学に進学するのが一般的になりますが、魯迅や周作人は制度が整わない時期の留学であったため、みな我流の勉強であったといえます。

我流というと独りよがり良くないように聞こえますが、彼らはその分だけ何を学ぶかという目的意識は非常に明確だったといえるでしょう。

学ぶべきことは祖国中国を救うために必要な思想であり、知識でした。中国を啓蒙するために必要な知識を学ぶという目的意識と直結しています。

私の問題意識も、周作人という存在が1枚の鏡だとすれば、その鏡に映しだされた合わせ鏡の日本文化とはどんなものであったのかという点になります。

#### 5. 鏡像としての日本①

このことは周作人自身にとっても同様であったといえます。

周作人が日本文化と向き合ったとき、中国人としての彼には日本文化に強い親近感を感じました、とても似ていると思ったのです。

いうまでもなく、日本では漢字が当たり前で使用されていて、中国人からすれば中国語と非常に近く感じるわけです。また、明治時代は和服が一般的でしたから、その和服を見て、古代中国人の着ていた服装とよく似ていると思うわけです。

2-1, 周作人の求学時代①魯迅との比較

	魯迅(周樹人)	周作人
生 平	1881年に紹興で生まれる	1885年に紹興で生まれる
南 京	1898年5月～1902年1月:3年半 江南水師学堂 (英語) 江南陸軍附属銘路学堂 (独語)	1901年9月～1906年7月 :5年 江南水師学堂 (英語)
日 本	1902年4月～09年8月 :7年 (明治35年～42年) 弘文学院 (速成科を修了) 仙台医学専門学校 (中退) 独逸語専修学校 (学籍のみ)	1906年8月～1911年夏頃 :5年 (明治39年～44年) 法政大学予科 (修了) 立教大学聴講生 (ギリシャ語)
言 語	ドイツ語、日本語に堪能、ロシア語、英語、エスペラントは初歩のみ	英語、日本語、ギリシャ語、エスペラントに堪能、ドイツ語、ロシア語は初歩のみ
婚 姻	1906年7月 (朱安) 1927年10月 (許広平)	1909年7月 (羽太信子)

ひるがえって、17世紀から異民族王朝の清朝に支配された結果、弁髪をして、服装も古代とは変わってしまっている。異民族王朝の支配から脱却し、本来の中国を取り戻すには、むしろ日本の風習に倣った方がいいと考えたわけです。魯迅もそうですが、周作人も日本に来る際に弁髪を切り落とし、日本では詰め襟の学生服を着たり、和服を着ていました。周作人にとって日本は理想とする昔の中国文化を映し出す鏡だったといえるでしょう。

## 6. 鏡像としての日本②

周作人にとって日本の社会文化はすべてが中国の美風を伝えるものばかりではありませんでした。それは裸足や裸体を忌避しない日本人に対する驚きです。

今日でも日本各地の温泉や銭湯では水着の着用を禁止するという英文の掲示を目にしますが、中国人に限らず、外国人にとって、同性の友人といえども裸体を他人に見せるのは抵抗感があるため、水着の着用しようとする人が跡を絶ちません。コロナ前は大変なインバウンドブームで多数の外国人が日本を訪れましたが、基本的に裸体に対する忌避の傾向は変わっていないようです。

今日は100年前の中国ほどではありませんが、女性が裸足になるのには強い抵抗感があります。靴下を脱ぐのはもちろんですが、靴を脱ぐことも抵抗感を持つのが普通でしたから、一昔前は中国人が日本家庭を訪問した際に靴を脱ぐことに抵抗感を示すのが普通でした。100年前の中国人であれば、女性は纏足をして、足首から下を子供の頃から縛ることで小さくする風習があり、小さくした足の纏足は夫となる男性以外には見せないの、裸足になるのは言語道断であったとすらいえるでしょう。

そのため纏足もせず、室内で当たり前裸足で歩いている日本女性の足を目にした周作人の衝撃は今日の私たちには理解できないほどだったと思われま。絶対隠しておかねばならない部分を公然と出して歩いている。このタブーに対する感覚は完全に文化的な違いに由来するとはいえ、自国の習慣を疑うことを知らない閉鎖的な人間にとっては驚天動地となるわけです。

そのため中国では長い間、あるいは今でも日本を好色淫乱な国だと誤解する向きがあるのは残念ながら自国文化にいかにか縛られているかということの証でもあります。

周作人は日本の洋書店として有名な丸善書店に通い、イギリスの性科学者、セクソロジーの大家であるハヴロック・エリスの著書に触れて、日本人を東洋のギリシア人と捉える見方に触れ、自らの禁欲主義に縛られた価値観を戒めるようになります。そして、セックスとは人生の根底に横たわる問題という考えに刺激されて、中国社会の禁欲主義を打破しようと努力します。ここで兄魯迅と、周作人がどのように日本で過ごしていたかを具体的に見てみましょう。

## 7. 東京での住居と学校

こちらの図は藤井省三先生の魯迅事典からお借りしたのですが、魯迅、周作人が住んだ場所に数字をつけて示しています。

魯迅が学んでいた弘文学院は現在の江戸川橋付近ですが、ちかくに市電がなく、最寄りの駅は国鉄飯田橋駅でした。学校の寄宿舎で暮らしていて、勉学には良いでしょうが、出かけて買い物をするのには不便だったと思われま。

周作人と一緒に暮らすようになった1906年以降は本郷に住まいを移し、生活は格段に便利になったと思われま。とはいえ、江戸川橋も、本郷も江戸時代は武家屋敷だったところで、繁華街ではありませんでした。本郷は東京帝国大学の目と鼻の先で、夏目漱石は学者町と呼んだように、学生と教師が住むところでした。魯迅もそうした雰囲気を楽しんで移り住んだと思われま。籍を置

### 3-1, 東京での住居と学校

- ・ 魯迅：弘文学院(1902-04)
  - ・ 牛込区 (江戸川区) [1]
- ・ 兄弟：本郷の下宿(1906-08)
  - ・ 住居：本郷区 (文京区) [2]
  - ・ 学校：神田区 (千代田区) [3]
- ・ 周作人：赤羽橋の下宿
  - ・ 住居：麻布区 (港区) [4]
  - ・ 学校：京橋区築地 (中央区) [5]
- ・ 住居は山手から下町へ



藤井省三《魯迅事典》P.12  
数字は小川による

く学校は神田にあり、繁華街にありましたが、彼らは学校も殆ど通わず、日々本屋と下宿の往復で暮らし、自分たちの同人誌を出すために執筆活動に没頭していました。

その転機が訪れたのが周作人と羽太信子との結婚です。魯迅は生活費を確保するために中国に帰り、周作人夫婦は家賃の安い麻布へと移りました。当時の麻布は交通が不便でしたが、家賃が安く、一般庶民が集まって暮らしており、周作人ははじめて日本人のなかに混じって暮らし経験をすることになります。通学していた立教大学は築地にあり、もともと外国人居留地だったところですが、日本橋、神田など下町と接していました。周作人は魯迅と別れてからの方が日本の庶民の生活を知る機会に恵まれたといえます。

## 8. 本郷三丁目・神田維新號

かねますはいまでも残っていますが、「本郷もかねやすまでは江戸のうち」と呼ばれるところですね。神田維新號など中国人留学生向けに当時から神田には多数の中華料理屋が開店し、一階は料理屋で二階は下宿屋を営む店が多かった。維新號は料理屋専業で知られた店です。いまのすずらん通りあたりが中華街のようになっていたと言います。

## 9. 羽太信子との結婚

魯迅と共に暮らしていた本郷時代は主たる関心はヨーロッパの文学であり、とくに東ヨーロッパのどちらかといえばマイナーな文学に強い関心を寄せていました。これはイギリス、ドイツ、フランスなどの強国によって侵略された弱小国、ポーランド、ハンガリーなどの国々がどのような文学作品を生んだのか、そこから学ぼうという気持ちが強かったわけです。彼らは中国人の精神を根底から改め、日本でも必ずしも読まれていたとはいえない文学作品を英訳やドイツ語訳で読んで訳して、『域外小説集』として刊行しましたが、中国本国でも反響は薄く、彼らは挫折感を味わいました。魯迅としては周作人の結婚もあって、やむえず自分の夢をあきらめて中国に帰って教師となりました。

## 10. 立教学校

周作人は兄と努力して続けていた文学作品の翻訳が挫折し、目標を失ったところで、日本語と文学に対する関心を深めていったわけですが、もう一つ新たにはじめたことがあります。それがギリシア語の学習です。中国とギリシアの歴史を有し、なおかつ現在も存在するギリシアの文学を知り、中国の改革に役立てたいという思いと、もう一つは日本が東洋のギリシアと呼ばれていることを知ったことも興味を持った原因だと思われます。日本でギリシア語を学べる場所は限られていて、東京帝国大学なら学べましたが、入学資格がない周作人は立教大学の前身である立教学校で学ぶことにしました。

## 11. 日本文学への関心

信子との結婚を機に日本語学習を本格化させ、大衆芸能への関心を深めた周作人は日本文学にも関心を深めてゆきます。魯迅も好んだ夏目漱石は周作人にとっても好きな作家となりました。特に「吾輩は猫である」が好きだと述べるように、おそらく夏目の文章の持つ洗練されたユーモアに落語にも通じるものを感じていたのだと思われます。そして、小説の内容そのものより、文章の味わいに愛着を感じるのは周作人の個性とも関係していると思われます。

後年の回想で坂元四方太の作品集、夢の如しを探し求めて、慶応義塾近くの書店で手に入れたと述べているように、ホトトギスで活躍した作家は周作人の好みだったようです。

## 12. 1910年前後の文学流派

周作人は後年自分が好む日本文学の流派、作家について図表のような作家と雑誌をあげています。ここから明瞭に読み取れるのは周作人の好む作家は1910年前後に集中していることです。

5-2,明治43年（1910年）前後の流派		
* 周作人の好む流派は1910年前後に集中している		
ホトトギス	1906年	俳句雑誌から後に文学雑誌へ発展。夏目漱石『吾輩は猫である』、坂本四方太『夢の如し』など。写生文を推進。
スバル	1909年	石川啄木主編。森鷗外顧問。ロマン主義を志向。
三田文学	1910年	慶応義塾発行。永井荷風を編集に迎えて創刊。『早稲田文学』自然主義と対立。
新思潮（第2期）	1910年	島崎藤村を顧問とし、谷崎潤一郎、木村荘八らが参加。耽美主義を志向。
白樺	1910年	武者小路実篤が中心となり創刊、夏目漱石への親愛を表明。反自然主義、理想主義を標榜。

「私の雑学18外国語」による 29

反自然主義の台頭期

これは周作人が日本文学に注意を向けた時期と一致するので当然ではあるのですが、

ここにあげられている「スバル」、「三田文学」、「新思潮」第2期、「白樺」には共通項があります。

それは反自然主義の旗印の下で活動していたことです。

ご承知の通り、自然主義は文芸誌の早稲田文学を牙城として田山花袋、島崎藤村、岩野泡鳴、徳田秋声、正宗白鳥らを中心に発展した文学流派で、明治後期は自然主義が隆盛を極めていました。しかし、自然主義から出発した永井荷風をはじめとして、1910年前後から自然主義を否定し、ロマン主義、耽美主義へと方向転換が始まります。

自然主義の定義は簡単ではありませんが、そもそもはフランスで科学主義から人間は社会的環境と遺伝でどのように生きるかが決まるという考えに基づいて小説を描くものですから、客観的といえ、その通りですが、ある種の運命決定論であり、人生は環境と遺伝で決まるという諦めに陥りがちになりますので、人間の意志は無視されてしまうことに対する反発が生まれるのは当然でもありました。その転換期に周作人が日本文学に触れたというのは偶然ですが、こののちの周作人の文学活動に決定的な意味を持ちました。

### 13. 無念の帰国と江戸の思い出

周作人が日本文学に興味を持ちだした頃、魯迅は紹興の実家で経済的に行き詰まり、これ以上周作人夫婦の生活を支えきれないと判断して、呼び戻す決意をしました。

ところが、周作人はのどかにフランス語をまだ勉強したいと言ってくるので、魯迅は自ら日本に周作人を訪ねて、二人を説得の末、周作人は夏に紹興へと帰ってきます。

わがままといえ、その通りですが、周作人にとっては無念遣る方なかったようです。

帰国直後に書いたらしい文章を周作人が自分で引用紹介していますが、タイトルは江戸の思い出というものでした。原文ではフランス語で書いていますが、少しでもフランス語を学ばれた方はご存じの通り、冠詞の使い方も違います。フランス語初心者らしい間違いと思われるかもしれませんが、文章自体は古典中国語で書かれたもので、抒情豊かな文章となっております。

その一部をここに掲げましたが、全体の趣旨としては、「宗邦しゅうほうを疏と為し、而して異地を親と為す、豈に人情たりや。」せっかく生れ故郷に帰ったのに馴染めず、むしろ異郷の東京に親しみを感じ、懐かしく思いだしていると述べるもので、本文ではその思い出として荒川の尾久あたりで川釣りを楽しむはずが、雨に降られて散々な目に遭い、這々の体で帰ってきて、握り飯を食ったら非常に美味しかったと語っているのです。内容は平凡そのものですが、これを周作人自ら写生文と呼んでいて、ホトトギスの文体を真似て書いたものと思われます。

この頃、写生文の模倣を通して、周作人は自分の文学的な嗜好なり、方向性を自覚したものと思われます。その意味では後に散文の名手として名を成す出発点がここにあったと思われます。

### 14. 帰国後の文学活動

周作人は帰国後しばらく紹興で生活しますが、中華民国成立とともに教育部の官僚となった魯迅の推薦もあって、北京大学教授となります。

北京大学赴任して早々に発表した日本文学紹介の論文では、最近の小説の傾向として二つあげ、いずれも反自然主義であったとして、一つは享楽主義の永井荷風、もう一つは理想主義として白樺派をあげてい

ます。周作人は五四時期には理想主義の白樺派を、のちになると、永井荷風に傾倒することになります。

## 15. 中国社会変革のために、文学革命「人間の文学」

北京大学教授に迎えられ、陳独秀が主宰する雑誌『新青年』という雑誌の同人となったことで、周作人の文学活動が本格化します。ようやく日本留学以来、黙々と重ねてきた研鑽の成果を活かすときが来たのです。そこには日本で学んだ成果が至るところに見て取ることができます。ここでは代表的な部分を拾い上げてご紹介いたします。

中国の近代口語文学の黎明である文学革命を語るとき、胡適の「文学改良芻議」、陳独秀の「文学革命論」と並んで周作人の「人間の文学」の三篇の文章を抜きに語ることは出来ません。なかでも周作人の論文は新しい近代文学が単に口語で書くだけでなく、どのような理念で書かれるべきか明瞭に示したという点で画期的なものでした。

この論文では繰り返し「人間らしい」文学を提唱すると述べており、同時期の評論「平民の文学」でも同様です。これは武者小路実篤を経由してトルストイの影響を受けたもので、この影響の延長線上で、周作人は武者小路実篤の新しき村運動に感銘を受けて、「日本の新しき村」を紹介します。

## 16. 武者小路実篤の影響

武者小路実篤についてはすでに触れたように日本留学時代に「白樺」を読んで以来、影響を受けていました。帰国後も紹興から雑誌のバックナンバーを周作人が熱心に買っていたことが明らかになっております。途中定期購読をやめた時期もありますが、五四時期には白樺派の強い影響が見て取れます。

なお、白樺発刊当時、魯迅はすでに帰国していたので、白樺派や武者小路実篤については周作人から教えられるまで知りませんでした。

若き日の毛沢東が北京大学の図書館で臨時雇いで働いていたことは有名ですが、この頃毛沢東君が教えを乞うて来訪という記録が周作人の日記に残っていて、毛沢東はのちに新しき村を模倣したと思われる共産社会コミュニズムの構想を論文で書いています。

30年後、毛沢東は中華人民共和国の指導者として、周作人に対して生殺与奪の権を握る立場にあるわけですが、周作人にしてみれば、あれは自分が昔いろいろ教えてやった学生なんだから大丈夫という思いもあったのだろうと想像します。

## 17. 武者小路実篤の影響②

周作人が新しき村や新しき村に代表されるヒューマニズムに傾倒したのかについては色々と語るべきことが沢山ありますが、ここでは周作人がもっとも最初に感銘を受けた武者小路実篤の戯曲について周作人がどのように論じていたかを紹介しておきます。

武者小路実篤の戯曲「或る青年の夢」は、日清戦争、日露戦争と勝ち戦ばかりを経験して戦勝気分が酔い、第一次世界大戦のなかで未曾有の好景気に沸く日本にあって、明確に戦争反対を提唱するもので、日本では発表当時冷ややかに迎えられ、批判というより黙殺された作品です。その作品を読んだ周作人は好戦的だと思っていた日本への印象を改めたと述べ、武者小路実篤がいうように「民衆が目覚めなければ」遠からず「恐ろしい結果」を将来するという言葉に刮目します。

ここでご注意いただきたいのですが、武者小路実篤が戯曲を書いたのは1917年1月で、その年の冬11月にロシア革命がおきて、ソビエト政権が誕生します。当時の世界の世論はソビエト政権に対して好意的な論評はほとんど無く、暴力革命によって、恐ろしい国が生まれたという認識でした。

周作人が武者小路実篤の戯曲を読んだのは1918年5月のことで、ロシア革命の直後です。

周作人は武者小路実篤がいう恐ろしい結果が現実のものとなったことに驚き、中国は平和な社会変革をしなければと考えたのです。さらに1919年5月にはヴェルサイユ講和会議において日本の山東利権を承認していた民国政府の態度を不満として五・四運動が勃発し、周作人の懸念は現実の物となりました。

五・四運動当時、周作人は日本に里帰り中でしたが、北京をはじめとして各地で暴動が起きたとの知らせを聞いて急遽帰国しています。五・四運動当時、周作人は熱心に「新しき村」の宣伝を行いました。その意図は当時も必ずしも十分理解されず、周作人自身も北京で新しき村支部を作ったりもしましたが、実際に共同コミュニズムを中国で作る事はありませんでした。その後1920年には過労で肋膜炎を発症し、入院生活を余儀なくされたため、彼の社会改革としての理想は道半ばで挫折せざるを得ませんでした。

## 18. 中国口語詩の創作と理論①

周作人は新しき村の提唱など社会変革を提唱する一方で、文学革命の一環として口語散文詩の提唱を行いました。ボードレールの散文詩「パリの憂鬱」を意識したという散文詩では川の氾濫を寓話的に描いて、暴力革命への畏怖を表現しました。

その後、散文詩の創作が広まらないとみると、簡潔で暗示に富む短詩型口語詩を提唱します。

## 19. 口語詩の創作と理論②

これは石川啄木の詩論を踏まえたものでした。評論のなかでは石川啄木の詩論を引きながら、「もしも私たちに「忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々の感じを愛惜する心があって」、それを表現したいなら、数行の小詩が最良の道具である」と述べて、石川が定型詩で日常生活の刹那を切り取って真実の感情を表現しようとしたものを自由詩で実践しようとしています。

この試みも一定の拡がりを見せ、短詩型を試みる詩人が現れましたが、あまり長続きはしませんでした。中国では詩歌は定型詩で長い間書かれてきて、平仄など押韻の法則も厳格に定められていたため、簡単に自由詩型に移行することは難しかったのだといえるでしょう。

## 20. 散文と詩の境界：写生文①

散文詩、小詩だけでなく、周作人は新たなジャンルとして抒情的な散文を美文として提起しました。これはホトトギスの写生文の中国版といえるでしょう。散文といえば理知的な文章となりがちですが、それだけでなく、詩的な要素も含んだ文章があってよいと述べました。

## 22. 散文と詩の境界：写生文②

その実践として自らも日本語で「西山小品」を書き、新しき村の文芸誌に発表したり、その文章を中国語に改めて発表しました。個人宛の手紙のスタイルを採りながら書くという「山中雑信」も発表しています。

いずれも平凡な日常生活を淡々と書き記すところに抒情性を持たせるもので、ホトトギスの写生文の模倣といえます。周作人はこののち散文の名手として大成するのですが、そのスタイルは1920年代の初めの試行錯誤で徐々に形成されたといえるでしょう。

## 23. バラ色の夢の破綻①

魯迅の推薦により北京大学教授となって以来、周作人は1917年から武者小路実篤やトルストイの影響を受けた人道主義的な文学を提唱してきましたが、新しき村のような社会改革は容易に成功せず、自らも健康を害してしまい、現実社会の厳しさのなかで挫折を味わいます。同時に家庭内での誤解により、魯迅と絶交するに至り、大きな精神的打撃を受けます。

その結果、高い理想が広く社会の万人に受け入れられないならば、自分を理解してくれる人だけを相手に文学活動をしてゆくという方向に転換せざるを得ませんでした。自分たちの創作する文学は誰でも理解でき、誰でも受け入れられるものにしなければという考えを棄てて、理解してくれる人だけを相手にする、そのために用いる表現や思想が多少難解になるのもやむえないという方向に転換します。

その方向転換のなかで周作人が強い共感を示したのが有島武郎です。

有島は武者小路実篤の新しき村運動に強い共感を示しながらも、最後は失敗するだろうと述べて、武者小路実篤と仲違いをしてしまいました。最期は自分の所有する北海道の土地を小作人に与え、軽井沢で自ら人生と訣別しました。有島の思想を見ると、武者小路実篤のような共同コミュニンの理想は早くから抱いていたはずですが、現実社会の厳しさを知るがゆえに早くから断念し、自らの恵まれた出自ゆえに滅びるべき階級であると考えて自らを裁いたといえるでしょう。周作人もその潔癖さ、先鋭的な思想に強く共感したのだと思われます。

有島のエッセイでは、文学作品を通じての相互理解の難しさを自覚しつつも、その相互理解が達成されたときに感じる喜びを述べており、周作人も万人に受け入れられることの難しさを自覚したがゆえに共鳴したのだと思われます。

## 24. バラ色の夢の破綻②

有島の言葉を引いて、自らの文学に限られた友人であっても受け入れられるのが理想と述べたとき、家

庭内では兄弟の絶交が起きていました。7月14日の魯迅と周作人の日記ではそれぞれ二人が別々に食事をするようになり、親しい友人の孫伏園とその子が遊びに来ていたのに驚いて帰ったことが記されています。

7月19日には周作人が絶交を告げる手紙を持って魯迅を訪ね、何も言わずに立ち去ります。この絶交の真相は今に至るも不明ですが、妻の羽太信子が魯迅の不貞行為を讒訴したため、周作人が絶交するに至ったと言います。中国では羽太信子が完全に悪者にされていますが、この事件で魯迅が家を出てしまいますが、もしも魯迅に非がなければ、一家でもっとも年長の母親が何も言わないのも理解できない話です。ここは母親ですら口を挟めない問題が起きていたのだとしかいえないでしょう。7月18日付で魯迅に書いた手紙は現在すでに公開されています。

## 25. バラ色の夢の破綻③

文中で述べる「キリスト教徒ではありませんが、幸いまだ耐えられますし、誰も責めたくはありません」という言葉から、罪を犯したのは魯迅だけではなく、おそらくは信子も罪を犯したが、周作人としては誰も責めたくないという風に読めます。そして、「私のバラ色の夢はやはり幻で、いま目にしているのが本当の人生なのかも知れません。」と述べますが、バラ色の夢は、このあとで書かれる文章でも繰り返されます。

## 26. バラ色の夢の破綻④

周作人にとって初めての単行本であり、文芸評論から抒情的散文まで収めた一冊、自分の畑の序文で、自分のバラ色の夢の理想は誰もが理解してくれるモノではなかったが、いまでも理解してくれる友人を求めていると述べています。ここから読み取れるのは魯迅という最も良き理解者を失った哀しみであり、それでも理解者を捜し求めるという悲痛な叫びです。理想とした人道主義的文学観は破綻しましたが、限られた範囲であっても理解者を得て、自らの文学を守り育ててゆこうという決意表明が自分の畑を守るという単行本の表題となって表現されているといえます。こののち、周作人が永井荷風に代表されるような退廃派の文学へと傾斜してゆくのは彼の文学的嗜好からすれば必然であったといえるでしょうが、その傾向について論じる前に時間がつきました。1920年代初期の周作人が日本文学思潮と強い連関を持ちながら活動していたという点についてのご紹介で幕引きとさせていただきますと存じます。

### 質疑応答

**質問**・高校時代の漢文で文法という項目がありませんでした。動詞とか形容詞が無い。特に感じたのは時制が無い、過去・現在・未来が無い。中国では漢字だけで上手なコミュニケーションが出来るのでしょうか。

**応答**・中国にも日本の古典の読み下しと同じように文法体系があります。日本の高校で教えないだけです。中国も古典中国語を教えますが、いわゆる白文漢字だけの文章ですが、これには文法があります。本来は日本でも説明すべきでしょうが、授業時間の都合で省いてのご理解ください。前置詞・助詞もありますので中国人は理解できるわけです。問題は日本人が読む漢文は既に書き下し文になっています。もはや、日本の古典文となっていますので文法の説明が必要ないわけです。大学で本格的に漢文を勉強する場合には基本の文法を学ぶことになるかと思えます。

**質問**・周作人が帰国後、中国は激動の時代になりますが、南京政府の時代で周作人はどのように評価されていたのでしょうか。

**応答**・1940年に日中戦争が本格化する時には周作人は高く評価されていました。散文作家として教科書にも採用されていました。戦争末期になり、北京大学の教授から日本人の大臣のすぐ下の地位につく時、決定的になるのは毛沢東が共産党政権を樹立したころですが、毛沢東は周作人を人を殺したわけではないから、文化的「漢奸」として許した訳です。1950年から1960年代には周作人の作品は殆ど読まれることが無かった。私が研究を始めたころから周作人の作品は1980年代から活字資料として価値のあるものと評価されるようになったのです。魯迅研究のためにも必要なものとされました。周作人は透徹した感覚と日本に対する理解も優れたものと評価され、90年代から研究する人が増えてきました。今の中国では若い研究者も増えて来ました。ただ、日中戦争時の



周作人は許せない。その意味で限定的なものではありますが、政治的な面でミスがあったとしても文学者として功績はあったのです。その意味で私は文学者としての周作人が日本とのかかわりの中で大きな役割を果たした文学的功績を評価したいと研究をしている訳です。

**質問**・お話の中で、日本は東洋のギリシアという事が有りましたがどのような意味でしょうか？

**応答**・中国も日本も文化的に古いものがある。ヨーロッパではギリシアが文化の源と言えるでしょう。日本が東洋のギリシアと言ったのは、ハブロック・エリスです。イギリスのセクソロジー、性心理学者です。中国もそうですが、より日本の方が特に基督教の影響で禁欲的なヨーロッパに比べてギリシアは禁欲的な考えに毒されていない文明を持っている。それは東洋の日本にも見ることが出来る。中国は儒教による禁欲的文化があるとの評価です。確かに日本は宗教的な禁欲的な面はあまり強くないと思われます。江戸時代の浮世絵もそうだと思います。中国は儒教の影響があったため、そうでは無かった。儒教では性は子孫の継続のためであり、快樂のためではないとされていました。日本にはそうした考えは無かったという事だと思われます。

以上

### 講師プロフィール

小川 利康 先生 (おがわ としやす) 早稲田大学 商学学術院 教授  
<略 歴>

1963年 東京都生まれ

早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学

1991年 大東文化大学外国語学部専任講師

1996年 早稲田大学商学部専任講師を経て

2004年 同大学 教授

<研究分野> 中国語、中国近現代文学、日中比較文化論

<主な編著書>

『叛徒と隠士 1920年代の周作人』(平凡社 2019年)

『周作人致松枝茂夫手札』(広西師範大学出版社 2013年)

その他 講演・論文・口頭発表多数